

# 「簡約日本語」不自然な日本語の受容をめぐる

大澤 希余子

## 一. はじめに

「簡約日本語」とは、一九八八年に当時国立国語研究所の所長であった野元菊雄により手掛けられた日本語の簡易言語体系である。

「簡約日本語」は、二〇〇〇語という限られた語彙数と簡略化された文法ルールにより日本語をやさしいものにし、習得時間を短縮するものである。その学習項目は複数の段階に分けられており、段階ごとに文型や文法事項を習得することにより、最終的に「日本人の日本語」に達することを目標としている。各段階の文法事項は活用形に準じた配列になっており、活用を段階ごとに制限していることから、途中段階では不自然な日本語を経由することを避けられない。そのため、その不自然さが世間の注目を集めた経緯がある。

現在、多文化共生社会を支える要素として注目されている「やさしい日本語」は、日本語を簡易化するという点で「簡約日本語」と共通している。

「やさしい日本語」とは、外国人にも伝わりやすいよう語彙や文法を簡易化した日本語である。近年、在留外国人数が増加傾向にあることに加え、国内の労働力不足により、外国人労働者に頼らざるを得ないという状況の中、

「やさしい日本語」の実用化に対する期待感は高まりつつある。

本稿は、「簡約日本語」の特徴である習得過程の言語における不自然さに着目し、現代の「やさしい日本語」に通ずる課題を考えるものである。

## 二. 時代背景

本章では、「簡約日本語」の時代背景として一九八〇年代に焦点を当て、「簡約日本語」の創作時期がどのような時代の流れの中に位置していたのかを考察する。

まず、二. 一では外国人の流入の経緯を、二. 二では流入してきた外国人労働者がどのような状況に置かれていたのか、その実態を中心に述べる。

### 二. 一. 外国人の流入

一九八〇年代、日本は加工・組み立て型産業の発展により、経済的な発展をつかみはじめていた。しかし、貿易黒字を重ねつづけたことが、大きな貿易摩擦をよび、一九八五年には先進国五ヶ国蔵相会議におけるプラザ合意に至る。円高を容認することとなった日本は、不況を克服するため、金融・財政政策をとり、その結果、日本はバブル期を迎えたのである。

バブル期には、過剰な品質を求める傾向や、ジャストインタイム方式などにより、人手が必要となり、多くの労働力が投入された。外国人労働者はそのような産業の場に姿を現したのである。

依光（二〇〇二）は、移民における基本的な特徴について以下のように述べた。

移民を送出す側と受入れる側を比較すると、一般的には、前者は後者よりも経済レベルが低く、雇用等の機会も乏しい。移民は、経済水準の低い国から高い国へより良いチャンスを求めて流れて行くと考えるのが自然である。(依光二〇〇二、五頁)

つまり、このような雇用の機会を求める外国人と、労働力を求める日本の企業の利害が一致したのである。しかしこの頃、制度上で就労が認められていた外国人は限られており、企業側としては法的に認められた外国人だけでは供給が追いつかないという実情があった。そのため企業側が、本来就労の資格を持たない外国人をも雇い入れるという状況が発生し、不法就労者を拡大させることとなった。なかには、観光目的で一時入国をした者を就労させるケースも含まれていたという。

## 二・二・外国人労働者の実態

本節では、外国人労働者の実態として、待遇、雇用形態の二点について述べる。

依光(二〇〇二)は、外国人労働者の待遇について、「外国人労働者の賃金水準は、日本人パートの賃金よりも若干高めになっていた。」としながらも、その実情について以下のように述べている。

外国人労働者に日本人の嫌う「劣悪な労働条件」の仕事割り当て、しかも男子若年の外国人労働者が主力であったことを勘案すると、外国人労働者の賃金は「安上り」であった、と評価することができる。(依光

二〇〇二、二二頁)

このような点から、外国人労働者は企業からその労働力を必要とされながらも、厳しい労働環境にあったことが窺える。

また、依光（二〇一〇）では、外国人労働者の雇用形態について以下のように述べている。

外国人労働者を雇用する形態はさまざまであるが、直接雇用と間接雇用に大別され、それぞれの雇用形態のなかに、正規雇用・季節工・パートなどがある。（依光二〇一〇、七頁）

このうち、当初は直接雇用が多かったと見られているが、次第に間接雇用の傾向が強まったと考えられる。間接雇用は、企業側にメリットとなる一方で、外国人側にデメリットを生む。

間接雇用をすることで企業側に考えられる主な利点としては、受注量の増減への即応、経費の削減、急な退職の回避などが挙げられる。それに伴い、外国人側には、単純労働の継続、労働力の質を高める機会を得られない、という二つのデメリットが発生すると考えられる。

つまり、間接雇用の広まりによって、その立場の弱さに加え、外国人労働者たちは長期間にわたり単純労働に縛られることになり、スキルを磨くこともできない、大きな給与アップも望めないという悪循環にとりこまれていたことになる。

### 三. 目的と対象者

本章では、「簡約日本語」の目的と対象者について考察する。まず、三.一では目的に着目し、そのうえで、三.

二では具体的な対象者像について考える。

### 三．一．目的

「簡約日本語」創設の目的について、国立国語研究所（一九九四）は以下のように伝えている。

国際共通語としての日本語を世界により広く進めるためには日本語のむずかしい点を取り払いエッセンスとしての日本語を創り出す必要がある。（国立国語研究所一九九四、一頁）

上記における「国際共通語」とは、国連などの国際的な場における公用語を指している。また、野元（一九七八）は、日本語をこのような世界レベルの国際共通語とすること「簡約日本語」の目的を以下のように結びつけ、説明を加えている。

日本語を世界の日本語にすることは可能だと思いますが、このほかに、やはり多くの人に日本語を学ばせ、底辺を広げておかなければならないと思います。ほうっておいても、経済力の伸張に伴い、日本語を学びたい人が増えてはきていますが、習ったときやさしいが上にもやさしい言語としておく必要があるでしょう。その入門の少なくとも初期の段階で学ぶのが「簡約日本語」です。（野元一九七八、二二二頁）

つまり、「簡約日本語」の最終的な目標は、日本語を国際的な場で使用されるような言語に押し上げることであ

り、直接の目的は、学習者を増やすことにあったと受け取ることができる。

### 三. 二. 対象者

野元は、学習時間が極めて少ないことが定まっている人を想定して「簡約日本語」を考案している。

野元（一九九三b）は、極端な場合、技術研修機関では十時間で日本語を教えるようにとの要求すらあったことを明かしている。「簡約日本語」自体は十時間での完成を想定したものではないが、彼にとって十時間という数字は「簡約日本語」の出発点となり、創作過程において常に意識の内であったという。

また、野元（一九九〇a）において、「簡約日本語」の対象者とは対極にあるエリート層の学習者について、学習時間の長さを除く以下の三点の特徴を挙げている。

#### 一. 経済的余裕のある人

二. ずっとではないかもしれないが、一時期、日本語の学習がその人の目標であった人

三. 一番目の人もいるかもしれないけれども、だいたいは、すでにさうとう高等教育を受けていて、二番目の外国語、あるいは三番目、四番目の外国語として日本語を習う人（野元一九九〇a、五九頁）

「野元は「外国語学習というのは、二番目の外国語が割に習得しやすい」（野元一九九〇a、五九頁）と述べ、初めての外国語として日本語を習う人よりは、二番目の外国語として日本語を習うの方が、外国語学習に対して慣れがあり、アドバンテージが大きいという考えを示している。

そして、このようなエリート層の特徴を踏まえ、「簡約日本語」の対象者とありかたについて、以下のように加えている。

仕事もしなくてはならないし、また学習者としても、必ずしも適性があるとはいえない、自分の国でもあまり学校へ行ったことのない人に対して百パーセントの日本語を目標にしてやらせるといのは、どうか（野元一九九〇a、五九頁）

これらのことから、「簡約日本語」は、生活上の必要に迫られて日本語を学ばなければならないにも関わらず、学習時間、金銭、言語学習経験などのレイネスの点でも不利な状況に置かれている人を想定し、考案されたと考えられる。具体的には、その主な対象は当時増加しつつあった外国人労働者などの生活者となり、「簡約日本語」は彼らの生活上の不便を緩和することに配慮された内容が含まれている。

#### 四. 文法

本章では「簡約日本語」における文法の扱い方について取り上げる。

まず、四. 一では、「簡約日本語」の基盤となった野元の理念について述べる。四. 二では、四. 一の理念とは相反している項目について着目し、その理由を考察する。また、四. 三では初期ステップにおけるます形へのこだわりについて考える。

#### 四・一・文法における基本理念

「簡約日本語」は、学習時間の短縮に配慮し、文法的な制約を設けている。この制約は、先に述べた「十時間の日本語教育」に基づいている。

野元（一九九〇c）では、十時間の日本語教育について、以下のような考えを述べている。

一つにはあいさつのことばとか、よく出会う場面を想定してそこでの会話のサンプルとかを教える、という方法があります。（中略）ちょうど英語の会話学校で、初級で Good morning. や How do you do? をいくら習っても、実のある、つまり内容のある会話はできないのと同じで、これでは大人の語学にはなりません。そこで、このような人への日本語教育の一つの方法として、十時間程度の人には思い切って規則を単純化した日本語を教えたらどうだろうと考えています。（野元一九九〇c、七二頁）

つまり、限られた学習時間の中で、できるだけ内容のある会話を可能にする方法として、規則を単純化するという手段をとったことになる。

#### 四・二・項目における特徴

「簡約日本語」の採用項目において特徴的な点は、希望や行為の要求を表す表現が、かなり早期の段階から重点的に扱われていることだ。「Vたいです」「Nがほしいです」「Vますようおねがいします」のような表現は第二課で出現する。これは野元の「外国人としては何かの希望を伝えたいという気持ちをもつであろう」（国立国語研究



所一九九四) という考えゆえのものであると考えられるが、第三課で「こんにちは」「おはよう」などのあいさつが出現することを考え合わせると、野元のこれらの表現に対する思い入れがかなり強かったことが窺える。

「簡約日本語」では全二十課中の九課が希望、意志、行為要求の表現に充てられており、またその内容も非常に細かく分類されている。第八課「行為要求の表現」においては、十四種類の表現が現れ、それらが積極的行為要求の表現、消極的行為要求の表現、中間の行為要求の表現の三つに分類されている。例えば、積極的表現として「Vてください」、消極的表現として「Vてくださいませんか」、中間の行為表現として「Vてくださいますか」などが含まれる。

これらの微妙にニュアンスの違う言い方を導入したことは、周囲と上手に関係を築くことを計算に入れていたという表れであり、「簡約日本語」の比重がその点に大きく傾いていたという証でもある。本来なら簡略化を掲げることで一機能一形式が選ばれるのがひとつの傾向であるが、この点であえて野元は逆を選んでいることには強いこだわりがみえる。

#### 四. 三. まず形へのこだわり

まず形からスタートし、ステップⅢでて形を導入するまでこの形のみを使用を制限している点には、野元の強い思いがあった。野元がまず形を重視した理由について、野元自身の著作及び論考から、ここでは三点を取り上げる。まず一点めは、時間的な制約による理由である。国立国語研究所(一九九四)は以下のように述べている。

このようにマスから出発するのは、まずは動詞によっていろいろ活用を覚える時間のない場合のことを考え

て出発しようと言うところからで、別にこの形が現実には多いからではありません。(国立国語研究所一九九四、十九頁)

二点めは、外国人の立場を守るためである。野元(一九九一)には以下のような記述がある。

外国人に教える日本語がですます調主体になっているのは伝統的ないき方であって、これをいつまでもやっている。「お前、水くさいぞ」といわれるような日本語である。しかし、日本語はなかなか友だちのレベルにはなりにくい言語で、あまり早くですます調をやめるといろいろ障害を起こす。従って、どうしてもですます調で出発し、これを相当程度維持しなければならないという面がある。(野元一九九一、一四四頁)

野元(一九九三b)では、上記の「障害」という点についてより具体的に例を挙げている。

「あるがままの日本語」で教えられた外国人がいきなり目上の人に対して「……だ」と言ったとき、この外国人の受ける不利な扱いを考えると、とてもそんな言葉から教えることはできません。(野元一九九三b、一〇八頁)

これらのことから、野元が失礼にならない形として丁寧形を選んだことが読み取れる。これは、野元が外国人の中でも切り捨てられやすい弱い立場にある者たちを、「簡約日本語」の対象として想定していたことに関連してい

るといえる。

三点めは、野元自身が、そもそも日本語教育をデスマス式ですべきという考えを持っていたためである。野元（一九七八）は「簡約日本語」について直接言及した作品ではないが、ここに野元の日本語教育に対する基本的な考えが以下のように示されている。

日本で年少者に対して日本語教育をしている人たちが、原則として教育では公式のデス・マス を堅持して教えているのは見識のあるやり方だと思います。再び言いますが、これが教室ではもっとも自然なことばかりでありまして、こここそごく普通の敬語形式を身につけるのに大変いい場所なのです。（野元一九七八、一八二～一八三頁）

以上述べてきた三点が、「簡約日本語」の序盤においてデスマス調を徹底するという方向性に関係したと考えられる。

##### 五・不自然さの受容

本章では、「簡約日本語」に寄せられた賛否の声に注目するとともに、非母語話者の不完全な言語を母語話者がどのように受け止めるべきか考える。

## 五・一・賛否の声

「簡約日本語」が注目を集めるきっかけとなったのは、一九八八年二月の朝日新聞の記事である。これは「簡約日本語」について世間一般に向けて紹介された最初の記事でもあった。この記事では「北風と太陽」の物語の一部を、初期ステップの「簡約日本語」でリライトして掲載している。

〈通常の日本語〉まず北風が強く吹き始めた。しかし北風が強く吹けば吹くほど、旅人はマントにくるまるのだった。遂に北風は、彼からマントを脱がせるのをあきらめた。

〈簡約日本語〉まず北の風が強く吹き始めました。しかし北の風が強くと吹きますと吹きますほど、旅行をします人は、上に着ますものを強く体につけました。とうとう北の風は彼から上に着ますものを脱ぎさせますことをやめませんとなりませんでした。〔朝日新聞〕一九八八年二月二六日夕刊〕

この記事が出たことで、「簡約日本語」には多くの賛否の声が寄せられるようになった。否定的な意見が多数を占める中、肯定的な意見の多くには共通点がある。以下にその一部を取り上げる。

初めから正式の日本語を学びたい人にはそのような機会を作ればよい。大切なのは少しでも早く人とコミュニケーション（交流）することだ。簡約日本語が妙だといっても、通じないことはないだろう。〔朝日新聞〕一九八八年三月二五日朝刊〕

ああいった日本語も作り、また我々はそれを不愉快に思わない気持ちを持つ必要もあると思います。(『毎日新聞』一九八九年十二月十四日夕刊)

言葉の役割は意志の伝達である。通じることを第一の目標に、言葉づかいで差別せず、おかしな日本語への寛容さを養うことが国際化の第一歩ではないだろうか。(『東京新聞』一九八八年三月二五日期刊)

つまり、肯定的な意見の多くは、日本語母語話者側が「簡約日本語」の不自然さを受け容れることの必要性を説いている点で共通している。

これとは対照的に、否定的な意見には、通常の日本語と異なる「簡約日本語」に対する強い抵抗感や、通常の日本語以外は日本語として認めようとしぬい姿勢が見受けられた。

この点から、「簡約日本語」をめぐる賛否は、不自然さの許容をめぐる議論という一面を有していることがわかる。

## 五. 二. 母語話者のありかた

非母語話者の発する日本語の不自然さを母語話者がどのように受け止めるべきか。

野元(一九七八)は、英語とフランス語を例にとり、以下のように述べている。

英語がどうして世界語になったかを考えてみましょう。そしてフランス語がどうしてその位置から転落しかかっているかも。(中略) 英語の方は、それを母語としない人たちの、それぞれの母語によるゆがみを割り

に心豊かに受け入れているのに対して、フランス語はその純一性を尊ぶ心情からそのゆがみをあまり快く受け入れない、というところにも理由があるのではないか（野元一九七八、二一〇頁）

田中（一九九〇b）も同様に、英語が国際化するに至った要因を以下のように述べている。

英語が国際語になったということは、じつは英語がイギリス人、つまり元来その言語を母語としていた人びとの手を離れてしまったことを意味する。ここでは、イギリス人の英語はもうすでに英語のいわば一方言ではないのである。シンガポール人の英語もフィリピン人の英語も日本人の英語も、発音や語彙、部分的には文法の一部でさえイギリス人の英語とちがっていても、それでも英語であり、イギリス人の英語となんの価値のちがいもない。（田中一九九〇b、八〇頁）

つまり、これらは、ある言語が国際語となるためには、非母語話者の不完全な言語を受け入れ、認めることが必要であることを伝えている。

しかし、日本人が異文化と接触する場合において、その受容能力や適応性が低いとする説は多い（中根一九七二、近藤一九八一、鈴木一九九九）。そして、その多くが日本人のそれらの能力の低さの要因として、島国という地理的条件や、単一民族、単一言語の状況で、極端に異文化との接触が少なかったことを挙げている。よって、「簡約日本語」への批判が多かったことも、異質なものを受け容れることへの抵抗感の表れだったと考えることはできる。

野元（一九九〇b）は、母語について「人間はすべて母語という色眼鏡でしか世界を見ることはできない、（中

略)つまり、無色透明な純粹客観の世界はこの世には存在しない」としたうえで、以下のように述べている。

外国語を学ぶということは、ある人が母語を話し始めた時からかけてきた色眼鏡のほかに、もう一つ色眼鏡をかけるを試みるということです。新しい色眼鏡で見る世界は、母語の色眼鏡で見た世界とはがらりと変わって、これが同じ世界だろうか、と思われるほど違った世界であるはずです。これはすなわち、母語から見ていた世界だけが、世界ではないということを知ることです。そうして、自分だけの見方以外の見方の存在を認め、それに対して寛容でなければならぬ、ということを感じることです。(野元一九九〇b、六五〜六六頁)

「簡約日本語」の当時の反響の大きさは、当時の人々が母語ではないもう一つの色眼鏡を持っていなかったということを意味する。「簡約日本語」は、不自然であったからこそ、人々に母語とは違う日本語の存在に気付かせる機会を与えた。もし仮に「簡約日本語」がごく自然な日本語に近いものであったら、母語以外の日本語の存在を知る機会にはならなかったのではないかと考えられる。

## 六. 考察

「簡約日本語」は、日本国内に外国人労働者が増加しつつあった時期に創作され、その内容は彼らの日常生活の不便を軽減することに重点が置かれていた。「簡約日本語」には「十時間の日本語」の考えにより、語彙や文法に多くの形式的な制限が設けられた。それはただ学習上の負担を減らすことに徹したのではなく、労働者の利益や

人權、意志を守るという野元の配慮が多く含まれた計算によるものであった。

しかし、「簡約日本語」は文法規則を簡略化することとひきかえに、途中段階に不自然な日本語を発生させることとなり、多くの反響を呼んだ。

「簡約日本語」の投げかけたこの不完全性の受容というテーマは未だ完結していない。「簡約日本語」の創成から約三十年を経ても、日本語母語話者の多くは、母語以外の視点を持ち合わせていない状況であることは否めない。しかしそれは、現代において「やさしい日本語」が成立するためには必要不可欠な要素である。

「やさしい日本語」は、非日本語母語話者と日本語母語話者との間に位置する共通言語である。非日本語母語話者側には最小限の文法と語彙の習得を求める一方で、日本語母語話者側にも通常の日本語をやさしく言い換えるなどの言語調整を求める。つまり、非日本語母語話者と日本語母語話者が双方に歩みよるといふ二方向の動きを有している。この構造において、日本語母語話者が言語調整を行うためには、非母語話者が日本語のどのような点を難しいと感じるか、どのように簡単に言い換えれば非母語話者に伝わるかを考える必要がある。すなわちそれは、非母語話者の視点を持つことであり、野元の言及した「母語以外の色眼鏡」と重なっている。

日本の現代社会は、「やさしい日本語」を手にも、今再び不完全性の受容という課題に向き合わなければならぬ時期を迎えている。「簡約日本語」は、日本語を世界語にするという目標には届かなかつた。また日本語学習素材としても十分な実用化には至っておらず、大きな実績を残したとはいえないものだ。しかしこのようにして、現代の「やさしい日本語」に通ずる確かな価値を残している。



## 七. 参考文献

- アルク（一九九〇）『日本語教育年鑑』凡人社。
- 岡村美保子（二〇一八）「我が国の外国人労働者」、『レファレンス』八〇四、二九〇五三頁。
- 北原保雄（二〇〇四）『朝倉日本語講座四 語彙・意味』朝倉書店。
- 黒羽栄司（一九九五）『現代日本語文法への十二の提案』大修館書店。
- 国際文化振興会（一九四四）『日本語基本語彙』日本出版。
- 国立国語研究所（一九六四）『分類語彙表』秀英出版。
- 国立国語研究所（一九八四a）『日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版。
- 国立国語研究所（一九八四b）『語彙の研究と教育（上）』大蔵省印刷局。
- 国立国語研究所（一九八五）『語彙の研究と教育（下）』大蔵省印刷局。
- 国立国語研究所（一九九四）『簡約日本語の創成と教材開発に関する研究』国立国語研究所日本語教育センター第二研究室分室。
- 国立国語研究所（二〇〇〇）『日本語基本語彙―文献解題と研究―』明治書院。
- 興水実（一九八八）『日本語教授法基本文献 復刻版』冬至書房。
- 小山修三（一九九二）『現代日本文化における伝統と変容 日本人にとっての外国』ドメス出版。
- 近藤裕（一九八一）『カルチュア・ショックの心理―異文化とつきあうために』創元社。
- 鈴木孝夫（一九九九）『日本語は国際語になりうるか』岩波書店。
- 鈴木孝夫他（一九八六）『国際化時代の日本語』、『言語』一五、四二〇六三頁。

- 田中望（一九九〇a）「外国人の使う日本語と外国人に対して使う日本語」、『日本語教育年鑑一九九〇年版』七五～七七頁。
- 田中望（一九九〇b）「日本語の国際化」、『日本語教育年鑑一九九〇年版』七九～八〇頁。
- 中右実（一九八八）『簡約日本語』を問う、『日本語学』七、七四～八六頁。
- 中根千枝（一九七二）『適応の条件―日本的連続の思考』講談社。
- 名柄迪（一九九〇）「ハワイ日系人の『ピジン・イングリッシュ』と『ピジン・ジャパニーズ』」、『日本語教育年鑑一九九〇年度版』八三～八四頁。
- 野元菊雄（一九七八）『日本人と日本語』筑摩書房。
- 野元菊雄（一九七九）『簡約日本語』のすすめ、『言語』八、六〇～六五頁。
- 野元菊雄（一九九〇a）「簡約日本語の意図するもの」、『日本語教育年鑑一九九〇年版』五五～五九頁。
- 野元菊雄（一九九〇b）「日本語教育と簡約日本語」、『日本語教育年鑑一九九〇年版』六五～六八頁。（『文化庁月報』一九八五年四月号において初出）
- 野元菊雄（一九九〇c）「十時間の日本語教育」、『日本語教育年鑑一九九〇年版』七二～七三頁。（『知識』一九八八年六月号において初出）
- 野元菊雄（一九九一）「国際化と日本語」、『日本人にとっての外国』一四一～一五三頁。
- 野元菊雄（一九九三a）「簡約日本語彙の意味分野」、『日本語学』一二、四〇～四八頁。
- 野元菊雄（一九九三b）「報告『簡約日本語』への反対論」、『文林』二七、一〇一～一二七頁。
- 野元菊雄（一九九四）「報告『簡約日本語』への反対論（二）」、『文林』二八、一六三～一七九頁。

野元菊雄（一九九七）「報告『簡約日本語』への反対論（三）」、『文林』三一、一七三～一八七頁。

水谷静夫（一九八三）『朝倉日本語新講座二 語彙』朝倉書店。

向井有理子（二〇〇三）「異文化の拒絶と受容－恐怖管理理論の観点から」、『都市文化研究』一、五〇～六五頁。

森住衛（一九九〇）「英語の国際化 簡約化の理念を中心に」、『日本語教育年鑑一九九〇年版』七七～七八頁。

依光正哲（二〇〇二）「日本における外国人労働者問題の歴史的推移と今後の課題」、一橋大学機関リポジトリ

(<http://hdl.handle.net/10086/14411>)。

依光正哲（二〇一〇）「外国人労働者問題の軌跡と今後の課題」、『労働調査』四九二、四～九頁。